分野（2）
気管支ぜん息患者の年齢階層毎の長期経過・予後を踏まえた健康相談・健康診査・機能訓練事業の
事業内容の改善方法に関する研究

研　究　課　題　名：気管支ぜん息患者の年齢階層毎の長期経過・予後を踏まえた健康相談・
健康診査・機能訓練事業の事業内容の改善方法に関する研究

調査研究代表者氏名：秋　山　一　男

| 評価コメント |
| --- |
| ・本調査研究は継続することにより、より成果が得られる研究である。<br><br>・長期予後の追跡調査は順調に進行していると評価できる。<br><br>・Web調査の成人対象者の抽出方法について、偏りがないことを確認できないため、詳述すべきである。<br><br>・小児及び成人の長期経過、予後を踏まえた長期予後システムを確立しつつあり、重要な課題である。ウェブによる調査も登録制度を確立するなど、新たな手法として進めていただきたい。<br><br>・小児ぜん息の長期予後研究はスタート時の年数が短いので評価が難しい。乳幼児喘鳴群のぜん息発症に関してはまもなく結果が出ると思われるので期待される。成人ぜん息において、予後に影響する因子を解明することは、健康相談や機能訓練事業に結び付けていくことが可能であり、その方向への検討を願いたい。<br><br>・小児については、今後長期にわたる継続や来年5年目での詳細な結果が待たれる。なお、今年度は喘鳴を伴う乳児についての報告がなかったと思われるが、来年行う予定か。ガイドラインに沿った治療を受けているのでガイドラインの評価にもつながる貴重な研究である。介入試験は可能であろうか。また途中経過の論文化が望まれる。<br><br>・成人について、本研究の成果は患者を診てゆく上でも、指導してゆく上でも貴重な資料となることと思われる。一部は論文化もされている。唯一問題となるのは多人数であるがインターネットを利用した検討であり、予算の関係もあろうがAIRJのような形の研究との比較ができる可能性はないだろうか。<br><br>・ぜん息の長期予後がどのようなものかという研究は常に古くて新しいテーマである。最初、主題と並行して進められる副課題が多すぎるのではないかと懸念したが、ここに来てこれらの各副課題間の統合性がよくとれて全体にまとまりが見えてきたことは評価できる。寛解群と非寛解群で有意差の出る因子の多変量解析は重要なデータである。有意差の出そうな他の因子についても是非検討して欲しい。 |